

一席 沖縄県知事賞

二十年の眠りと涙を一粒

秋 沙美代

『そっちは上手くやれていますか？』

たまには電話しなさい

何かあったらいつでも帰って来なさい』

月に一度、母からメールが届く。

今朝のお天気お姉さん曰く、昨日から続く雨は今日の昼に止み、ピーカン天気になるとのことだった。しかし午後になっても雨は止まず、夕方頃になってようやく小雨程度に落ち着いた。

雨宿りという名目の残業を終えた頃、オフィスに残る女性社員は松江ただ一人だった。女子力の高い他の連中はカレの車で帰って行くなどして、他に残っているのは数名の男性社員のみ。彼らは業務を進行させる気があるのかないのか、女性社員の中で誰の尻が一番デカイかという話に花を咲かせている。

女として見てもらえないことには慣れている。小学校の頃からいわゆる陰キャラで、クラスでは空気のような存在だった。そのことに苦痛を覚えたことはないし、陰が薄いおかげでイジめられるということもなかった。社会人となってから、協調性が無いと評されることは度々あったが、そっちの方が業務に集中出来るので都合が良いと常々思っている。

身の周りを軽く片付け、松江はデスクから立ち上がった。一瞬だけ向けられた男性社員の視線に軽く一礼する。「おう、おつかれ〜」と気のない返事を背中に浴びつつ、松江はオフィスを後にした。

階段を下りて玄関ホールに抜けると、ガラス戸越しに外の様子が窺えた。

曇った空の下、大勢の人が行き交っている。東京の空はいつもどんより黒い。小雨が降りしきる今はそんなの当たり前なのだが、例えば晴れの日でも、なぜだか妙に眩しいとは思わない。それと空気もあまりよろしくない。故郷を離れた二年前、初めて東京の地に降り立った時、空気の腐ったような匂いに驚いたのをよく覚えている。慣れてしまった今でも、美味しい空気が恋しくなることはたまにある。

そして、今日のようなちよつとした雨の日が可笑しい。肩をわずかに濡らす程度の雨なのに、東京の人間たちは豪雨が訪れたとばかりに猫も杓子も傘を求める。コンビニの傘売り場が品切れ状態になるなど、地元では見たことのない光景だった。

フラリと、松江はコンビニに立ち寄った。雨の日のコンビニはいつだって人で混み合う。そしてやはり、傘は品切れ状態である。たった今最後のビニール傘を手にしたサラリーマンは、ホクホク顔でレジに赴いて行った。リーチイン冷蔵庫の扉を開け、ズラリと並ぶ缶チューハイとビールを眺

めた。カクテル風味と銘打たれたオシャレなチューハイは、松江にはちつとも魅力的に映らない。彼女にとって、けれどアルコールならそれで良かった。四、五個適当にカゴに放り込んだ酒の会計を済ませ、早々とコンビニを出て行った。

地下鉄まで歩き、電車に揺られ、自宅アパートに辿り着いた頃、陽はすっかり落ちていた。八畳一間、風呂ナシのワンルームは、当たり前だが今朝出た時と同じように散らかっている。脱ぎっぱなしのシャツなどを足で片付け、なんとか座る場所を確保した後、松江はちゃぶ台の上にレジ袋をガサリと置いた。

向こう三日間、休暇を貰っていた。初日の今日は心ゆくまで飲める。そう意気込んでいたのに、いざ自宅に帰ってみると眠気の方が先立った。缶チューハイを一本だけ開けた後、松江の意識はトロリトロリとまどろみ始める。

初めてカレの家に呼ばれた日も、ちょうど今日のように小雨のパラつく天気だった。その日は朝から準備万端で、髪もメイクもこれ以上ないほど整えた。カレは車で松江のアパートまで迎えに来た。デートはありきたりなもので、映画を見に行き、夕方には居酒屋で安い酒をカレの奢りで飲み、その後はまだ飲み足りないというカレに引きずられるようにして家へ呼ばれた。近くのコンビニでワインとツマミを買った。レジに並んだカレは横のショーケースに並んだチキンを指差し「これも食べる？」と松江に聞き、返事を待たぬ内に店員に注文した。

暗い夜道を二人並んで歩く時、傍から見たらまるで夫婦のようだと思つて松江は舞い上がっていた。車のドアを女に開けさせないカレは、部屋の扉も先んじて開けてくれた。部屋の中はよく分からないコロンの香りに満ちていて、これが男の部屋の香りなのかと思うと、松江はこれからのことに対する期待でクラリとした。

「どうぞ、松江ちゃん」

カレはテキパキとした動きでグラスを二つ出し、ワインを注いで松江に差し出した。カレと会話をしながらだと、飲むペースはいつも以上に早くなる。それだけ酔いも早く回り、自分でも知らぬ内にカレの肩に頭を預けており、やがてヒョイと身体が持ち上げられた。その時のフワリとした浮遊感が、松江を幸福の絶頂へと誘った。

「愛してる」

その後のことはよく覚えていない。次の日の朝になっても雨は止むことなく降り続いており、曇り空をぼんやり眺めた後には、寝息を立てるカレの額にキスをした。半分だけ手をつけたチキンは干からびていたが、そんなの意識の外だった。

処女でなくなつた二十歳の誕生日。自分が一気に大人になつたかのような高揚感を、松江は今も忘れられずにいる。

嫌な夢から覚めた時、時計の針は朝の十時を回っていた。思わず飛び起

きる松江だったが、今日が休暇一日目だったことを思い出し、フツと苦笑いの後に眠気覚ましの水をコップに注いだ。

携帯の予定表を呼び出し、飛行機の時間が十二時であることを確認する。テレビを付け、洗面台で顔を洗い、朝の支度を手短に済ませた後、昨日手を付けなかった二本目のチューハイを冷蔵庫から取り出した。朝から酌をするとは立派な身分であるが、それは嫌な夢を見せられた自分へのささやかな慰めでもあった。

カレと別れたのは一か月前のことだった。帰宅途中、女と一緒にいるカレと鉢合わせた。カレは焦った様子も見せず、女と二人で松江の前を素通りしていった。その瞬間、カレに対する興味だとか尊敬だとかいう諸々の恋愛感情が、嵐の時に擦ったマッチの火よりも容易く消えた。その夜カレからメールがあった。別れよう、というたつた四文字の言葉に、松江もたつた二文字「うん」と返信し、その後アドレスからカレの名前を消した。

自暴自棄になるようなことは一切なく、所詮そんなものだったのだと思

えば、自分でも不思議なほど気にならなかった。カレのことを考えるのに使っていた時間を仕事に回すと、業績は大きく伸びた。まとまった休暇を認めてもらったのも、その影響が大きいだろう。

それから松江は、覚えてたの酒を浴びるように飲んだ。もともと強い方ではなく、缶チューハイを二本も飲めば眠くなるのに、毎晩三本も四本も無理やり胃に流し込んだ。失恋の痛みなんてへっちゃらだと、酒は自分に暗示をかけてくれた。

十一時を過ぎた頃、松江は家を出て最寄駅に向かう。そこから乗り継ぎを二つ経由し、空港に辿り着くまでに一時間ほどを要した。

正月も盆の日も、会社は営業を止めて社員全員に休みを与えた。しかし松江が実家に帰ることはなかった。たまには顔を見せに来いという両親には、飛行機代が無いだの仕事が忙しいだの何かと理由をつけて断っていた。

慰安旅行——それが一応、休暇の名目である。この三日間を利用して計

画しているのは、ちよつとした里帰りだった。再会を喜ぶような友人などいない松江にとって、里帰りといっても実家で適当に過ごすだけである。明日飛行機で帰るから、そう母にメールすると、好きなもの作って待てるからね、といつものように優しい言葉が返って来た。

空港の搭乗口を抜けると、ほどなくして飛行機の中に案内される。やがて鉄の塊は滑走路を飛び出し、東京に対するつかの間のサヨナラを松江に告げさせた。

実家には、会いづらい人がいる。

実の父親は、松江が生まれた直後に姿をくらました。間もなくやってきた母の再婚相手が松江にとって父親と呼べる唯一の存在である。常に口を真一文字に結び、普段から笑ったところを見せないその男は、名を藤夫という。

再婚相手の連れ子など危険物のように扱って丁度良いくらいだろうに、

彼は松江に対して何かと厳しかった。些細なことですぐ叱りつけ、門限を少し破ることも許さなかった。松江はそんな父が怖くて仕方がなく、幼い頃からいつもビクビク震えながら過ごしていた。

それは松江が高校生の頃、進路を決める時だった。高校を卒業したら絶対東京に行くんだと、松江は心に決めていた。テレビでしか見たことのない東京、満員電車が行き交う都会に、漠然とした憧れを抱いていた。そのことを両親に話すと、父が猛反対した。こっちで大学を出てから先のことを考えろ、まだ二十歳にもならん子どもが内地に行くのは許さん、と一方的に突っぱねられた。だが松江も引かない。何度望みを撥ねのけられてもくじけず、卒業式の日まで議論は続いた。高校に通いながらアルバイトで貯めた百万円の入った通帳と、飛行機のチケットを見せ「明日、お父さんが何と言おうと家を出て行くから」と言い放った。

その時父は、松江の頬に思い切り張り手した。初めてのことに松江は、痛みよりも驚きの感情に支配され、やがてそれは涙となって両頬を伝った。

「父親ツラしないでよ、本当の親でもないくせに！」

それが父との最後だった。その時の父の顔を、松江は今もよく覚えてい
る。怒りと悲しみと虚しさが溶け合ったような表情は、何も言わず唇を震
わせていた。その翌日の朝一番で松江は家を飛び出し、そのまま空港に向
かった。

父に謝ること、それが帰省の一番の目的だった。いつまでも喧嘩してい
られる年齢ではない二十歳という節目を迎え、ずっと胸の中につかえてい
る後悔を払拭したいという思いがあった。

東京に渡ってから、父とは一度の電話もしないまま今日に至る。どうい
う顔をして会えばいいのか、そんなことを考えれば考えるほど、今日の空
模様の如く松江の気はどんより重くなった。

那覇空港に降り立ち、松江はそのままモノレールに乗った。

モノレールの窓から見る景色は、二年前と比べてさほど代わり映えし

ていなかった。国場川沿いのコンビニは相変わらず駐車場が高校生の溜ま
り場となっており、これからどんどん新しい建物も増えていくのだろうと
思っていた新都心や古島周辺も、二年という短い時間では記憶を塗り替え
るほど発展らしい発展も遂げていなかった。そんなのんびりさが沖縄らし
いというか、松江は言い表すことの出来ない安心感のようなものを覚え
ずにはいられなかった。

終点の首里で降り、そこから五分ほど歩くと実家がある。昨日からの小
雨がしつこく降り続けているが、松江を含め傘を差す人間はいない。少し
の雨なら濡れて歩くのが沖縄県民だ。

実家へ行く前に、松江は近所の公園へ足を運んだ。小さい頃よく遊んだ
場所。今は安全の配慮だとかなんとかで大体の遊具は撤去され、砂場とす
べり台とベンチだけが辛うじてポツンと残っている。

ベンチに腰かけると、空港の売店で買ったさんぴん茶で一息ついた。学
校が終わった時間らしく、公園の敷地内には十名ほどの小学生が楽しそう

に遊んでいる。

ふと、子どもたちの輪から少し外れたところでしょんぼりしている一人の少女が松江の目に留まった。皆と一緒に遊びたいけれど、仲間に入れてと言いだせない。少女の姿に、松江は幼い頃の自分を無意識に重ねていた。人より内向的だった松江もまた、公園に来ては皆から隠れるように一人遊びをしていた。

ではなぜ公園に来ていたのかというと、家に居なければ父親と顔を合わせる心配が無かったからだ。日曜など父はいつも家におり、それが嫌だった松江は門限ギリギリまで、公園に誰もいなくなっても家に帰らなかつた。

——本当の親でもなくせに——

覚えずして、頭の中に苦い思い出が蘇る。お茶のキャップを閉めると、松江はのろのろとベンチから立ち上がり、実家の方を目指した。

二年ぶりに見た母親の顔は変わっておらず、かつてのように優しい笑顔

を松江に向けた。お腹は空いてないかと言うので、空港でも軽く食べてきたのだが、せっかくだから好物のゴーヤーチャンプルーを二年ぶりに作ってもらった。

「お父さんは？」

母の顔をよく見てみると、目じりのシワがより深くなっているようだった。松江は黙っておくことにした。

「今日は遅くなるって電話あったよ。多分八時くらいじゃないかねー」

「あ、そう」

小さい頃、厚切りのゴーヤーは苦手だったが、大きくなるにつれその美味さに気付き始めた。

東京での食事はコンビニ弁当がメインだった。自炊なんてしたことがなかった松江の胃に、懐かしい味の温かさが染みていく。

「あんだ、自炊はちゃんとしてるの？」

痛いところを突かれた。松江はゴーヤーをモグモグと飲み下し、苦い顔

で答えた。

「してるさー、ちゃんと毎日」

「本当かねーこの子は。男の胃袋掴めんと行き遅れるよ」

「もう、大きなお世話」

ごちそうさま、と早々に食べ終えた松江は食器を片づけると、階段を上がったところにある自分の部屋に向かった。

いつだったか母が物置代わりに行っていると聞いていた自室は、松江が沖繩を出て行った時と変わらないままだった。ちよつとした小物も、ベッドも、教科書の類もそのままの姿で、松江はそれが嬉しかった。ベッドに飛び乗ると、スプリングは聞いたことのないような悲鳴を上げた。主の体重の方は、二年の間にほんのちよつとだけ変動したらしい。

「はあ」

帰って来た。降り立った故郷のことを考えていると、長旅に疲れた身体はベッドと同化するようにして、あつけなく眠りの世界へと落ちていく。

沖繩の田舎からサトウキビの匂いをまとわりつかせてきた松江に対し、東京の風は冷たかった。何の考えもなしに飛行機で飛び立ち、真っ先に困ったのは住居だ。すぐ見つかるものだと思っていたがそう簡単にはいかず、カプセルホテルでの宿泊を余儀なくされた。アパートが見つかったのは東京に来て二週間後、ワンルームで家賃は八万円。沖繩なら広めの 2LDK に加え駐車スペースも借りられる値段である。敷金礼金の制度をそこで初めて知った時は吐き気さえ催した。

仕事もそう簡単には見つからず、アルバイトをしながら会社の採用試験をいくつも受けた。申し訳程度の資格しか持っていない田舎出身の商業高卒女を雇ってくれた会社がようやく見つかる、お茶汲みでも何でもした。

入社半年、ようやく仕事に慣れた頃に出会った男性が、五つ年上のカレだった。部署も違うカレとは、最初は顔を合わせれば挨拶を交わすくらいの間柄だった。カレの方から次第に距離を近づけはじめ、初めて食事に誘われた時は、それがなにを意味するのか松江は良く分からなかった。男性

と二人で食事をするなど今までに無い経験だった。

初めて親密な関係になった男性に松江が夢中になるまで、長い時間は必要なかった。故郷を離れてやって来た地で、自分はこの男性と結婚して、もう二度と帰ることはないのだろうかとうと疑わなかった。

関係があっけなく終わってしまったのは、その矢先のことである。

かつてテレビで見た東京はいつだってキラキラと輝いていた。巨大な建物が立ち並び、街を往く人は皆オシャレな格好をしている。給料も高いし、娯楽は豊富、何より沖繩にないものが全て揃っていることに、憧れを抱かずにはいられなかった。東京が自分を大人にしてくれると、十代だった松江は本気で信じていた。

しかし実際の東京はくすんだ色をしていた。物価は高いし空気は汚れているし、砂浜は白くない。それに人々が打算的で、いつ何時も油断するわけにはいかない。それに気付くのに失恋という授業料で安く済ませることが出来たのは、松江にとって不幸中の幸いだった。

世間知らずの自分が東京に行くこと自体、そもそも間違っていたのだ。

親が子にかける言葉とゴーヤーの苦味はよく似ている。ゴーヤーの美味さが分かる年齢になった今、父の言っていたことは全て正しくて、それらは自分を思っていたことだったと理解出来る。

その有難さに気付けずにいた、幼かった自分の愚かさを謝らなければならぬ。もう松江は、意地を張ることが許される十代の子どもではないのだ。

空港を出る前に飲んだチューハイのツケが遅れてやってきたらしく、目覚めたのは次の日の朝だった。

「おはよう」

時刻は午前六時を少し過ぎていた。台所に立った母親が弁当を作っている。彼女は来る日も来る日も、父のために朝早く起きて弁当を作っていた。この日の献立は豚の生姜焼きとホウレンソウの炒め物だ。

「あい、早いね。朝ご飯準備するから、その間に顔洗って来なさい」

妙に懐かしいやり取りだった。顔を洗って歯を磨く、ほんの五分にも満たないその時間で、母は朝食を用意してしまう。

「ゲェツ、もしかして私は朝から生姜焼き食べないといけなの」

「当り前さ、昨日は夕飯も食べないで寝てからに」

言われてから、松江のお腹は思い出したかのようにグーグーと空腹感を叫び出した。母の言葉に従い顔を洗って歯を磨き、居間に戻ると、カロリーが少し高めなことを除けば完璧な朝食が用意されていた。松江はテーブルにつくと、テレビの電源を入れ、豪勢な朝食に手を付け始めた。

「内地に良い人はいないの?」

父の大きな弁当箱にご飯を詰めながら、ぼやくように母が言った。

「全然」

「はあ、まったくあんたは昔っからちーつとも男の気配がないからねー。母さん、心配さ」

「可愛い娘がどこの馬のホネとも知れない男に引っ掛かることは心配じゃないわけ」

「この際馬のホネでもいいから連れて来て、母さんを安心させてよ」

「はっさ、たまーに帰るとすぐコレよ。大体まだ二十歳なんだから、そんなこと気にするのはまだ早いでしょー」

「二十歳だから気にするわけよ。女の売り手市場の時期に仕事ばかりしてたらダメよ」

「はいはい、気をつけまーす」

ご飯をかき込むように平らげた頃、時計は六時半を指していた。

父は毎朝七時という決まった時間に起きてくる。定年を二年後に控えた現在も、きつとその習慣は変わっていないだろう。つまり、もうすぐ松江たちのいる居間にやってくるということ。

「ちよつと散歩行って来る」

「待ちなさい松江、あんたは昨日からお父さんに顔も見せないで」

「いいでしょ、二年ぶりの故郷なんだからちよつと懐かしむくらい」

そうして椅子から立ち上がりかけた、その時である。ギィと音を立てて居間の扉が開いた。そこに立っていたのは寝間着姿の父だった。

松江は苦い顔をした。父は「ゴホン」とせき込むと、スタスタと歩いて椅子に腰をかけた。分厚い眼鏡に太いまゆ毛、浅黒い肌など、父の雰囲気は二年前と何一つ変わらないうちにいた。

「おはよう、松江」

「うん、おはよう……」

立ち上がりかけた腰を、松江は下ろさざるを得なかった。二年ぶりに聞いた父の声は若干しわがれており、外見はそこまで変わらないうちに二年分の歳は確かにとっていた。

「はい、お父さん」母が父の前に朝食を置いた、その去り際に彼女は松江にウインクしてみせた。

父は生姜焼きを黙々と食べ始めた。食事の時はテレビを消すというのが

父のルールで、彼はブラウン管に映った朝のニュースをブツリと消した。

漂う沈黙。黙々と箸を進める父を見ながら、松江はコップに半分だけ残った麦茶をチビりと飲んだ。

「どうだ、東京は」

箸を少しだけ止めた父は、松江の方を見ず、唸るような低い声を発した。

「うん、上手くやれてる」

「そうか」

父は昔から食べるのが早い。一口が大きい上に、あまり噛まずに飲み込むものだから、並べられた朝食は五分も経たぬ内に生姜焼きが一きれ残るばかりとなった。

「恋人は出来たのか」

「いないよ」

「ナイチャーと結婚するのか」

「分かんないよ、そんな先のこと」

「そうか」

父は最後の生姜焼きを飲み込んだ。

「ごちそうさま」と言つて、父は居間を離れていった。間もなくしてスーツ姿で戻ってくると、「行って来る」と母と松江に言い残し、家を出ていった。

朝から米一合は食べる父。どんぶり茶碗には一粒の米も残っていない。朝食の後片付けを手伝いながら、松江は母にこう言った。

「散歩、やっぱいいや」

……これでは何のために帰ってきたのか分からない。

父親といざ面と向かった時、上手く言葉を紡ぐことが出来ないのは昔からだ。浅黒い肌に浮かぶギョロリとした目を、松江はずっと苦手としていた。

ちよつとごめんと言えればそれでよかつた。例えば食事を囲んでいる最中に「そういえば」と切り出し、その場の流れで「あの時はごめん」と言

えればいい。しかしそれだけのことで、松江にとってはこれ以上ないほど荷が重かつた。

二年前、父がどんな気持ちであの言葉を受け取つたのか考えると、松江の胸は締め付けられるようにズキズキ痛む。実の娘のように接してくれた父。その気持ちに報いたのは、あまりに酷い暴言。

ごめんなさい。ただそれだけの言葉を素直に口にするのに、二年という時間はあまりに長かつた。

それから松江は自室にこもり、昔読んだ漫画をぼんやり読み返して時間を潰していた。どれもこれも穴が空くほど読んだ雑誌だ。そうしている内に、今朝から少しずつ晴れだした空からはすっかり雲が流れ去っていた。

午後四時、松江はだいぶ遅めの昼食を摂っていた。

「あんた、父さんに謝らなきゃいけないことがあるんじゃないの」

冷蔵庫から出して温めた昨日のゴーヤーチャンプルーは、より苦味を増

している。

「うん」

「父さんね、あの時相当ショックだったみたいよ。しばらく仕事も手に付かなかったみたいで、何かあったんですかって仕事場の後輩から私に電話があったのよ」

娘と喧嘩別れしたんです、なんて言えないじゃない。そうやって母は力ラリと笑った。

針のむしろに寝かされたようで、居心地は限りなく悪かった。食事を終え、松江は自室に戻ろうと立ち上がった。

「待ちなさい松江」

「何よ？」足を止めた松江は気だるげに母の方を向いた。

「これ、見てみなさい」

母が取り出したのは、ピンクの携帯電話だった。昔から使っている古い機種だ。パカリと携帯の画面を開き、カサカサの指がメール画面を呼び出

す。送信済みメールの保存ボックスが表示された。

見覚えのあるメールが次々表示される。それは母が松江に送ったメールの数々だった。元気にやっているかだの、いつでも帰って来いだの、そういう言葉が綴られている。

「あんたに送ったメール」

「見れば分かるよ」

「これね、お父さんが私の携帯使って送ってたのよ」

松江はハツとして、母の顔とメール画面を交互に見た。

初めて聞く事実である。松江の携帯に送られるメールの送信者は常に母の名前だ。

「照れくさかったんだろうね、自分の名前で送るの。機械が苦手なものだから、メールの仕方もしょっちゅう私に聞いて」

「そうなんだ」

松江は自分の携帯を開き、過去に母の名前で送られてきていたメールを

改めて読み返した。

東京はどうですか。元気に過ごしていますか。
辛くなったらいつでも帰って来なさい。

「お父さんには内緒にしててよ？　くれぐれも松江には黙つとくように言われてたから」

人差し指を口元に当て、母はいたずらっぽく笑う。
「分かってるよ、もう」

携帯の画面には松江の身体を気遣う内容だったり、励ましの言葉だったり、そういう言葉がいくつも並んでいた。それを見ながら松江は、身体の大きな父が背中を丸めて小さな携帯をポチポチやっている様子を想像した。その姿はどこか可愛らしくて、可笑しくなってクスリと笑った。

「それとね、松江。もう一つあんたに見せたいものがあるのよ」

そう言って母は食卓から立ち上がり、両親が寝るのに使っている寝室に入って行った。間もなく出てきた彼女は、手にニワトリの置物を抱えていた。

「これ、何だか分かる？」

「分かんない。何それ」

コトリと、テーブルの上にニワトリが置かれた。高さは三十センチくらいで、よく見ると背中の方にフタらしい出っ張りがある。

「あなたの誕生酒」

「誕生酒……？」

すると母はポツリポツリと昔話を始めた。松江の実の父親が、ある日突然姿をくらましたところから話は始まった。

夫が姿をくらまし、生まれたばかりの松江を抱えて途方に暮れていたところを慰めたのが、藤夫——今の父だった。母がかつて働いていた市役所の職員だった父は、やがて母に結婚を申し込んだ。母は最初その申し出を

しぶった。離婚歴のあるコブ付きの自分に負い目を感じていたのだ。

『あなたのことはもちろん、娘さんのことも、本当の子どものように思っ
て接するつもりです』

そんなプロポーズの言葉に、母は泣きながら首を縦に振ったという。
時を同じくして、父は知り合いの酒造屋に頼み込んである物を作っても
らった。それがこの誕生酒である。

子どもの出生と同じ時期に用意するもので、その酒は子どもの干支を
象った甕の中で大切に保管される。そして子どもが二十歳を迎えた時に開
け、親子でその酒を酌み交わすのだ。二十年という年月をかけて熟成され
た酒の味は、それはそれは素晴らしいものらしい。

「松江が二十歳になったら、二人でこの酒を飲むんだーって。お父さん、
すごく楽しみにしてたのよ」

酉年の松江に合わせて作られたニワトリの凛々しい表情を、松江は
ぼーっと見つめていた。

父の自分に対する思いを知って、松江の胸に不思議な感覚が込み上げる。
それは胸の内側をチリチリと熱くした。

頑固で堅物、父のことならなんだって知っていると思っていた。それな
のに次々聞かされる裏側は初めて知ることばかりで、松江はくすぐったく
て仕方なかった。

父はきつと許してくれる。松江の心にもう躊躇いは無い。

父はその日、七時過ぎに帰って来た。

「ごめんなさい、お父さん」

テーブルを挟んで松江は父の対面に座り、その目をまっすぐ見つめて
言った。

昔から表情の変化に乏しい父が、頬をピクリと反応させて、松江のこと
をまじまじと見つめた。

「なんだ、突然」

「二年前、私お父さんに酷いこと言ったでしょ」

なんだ、そんなことかと言わんばかりに、父はフンと鼻を鳴らした。

「……お前が元気にいるのなら、そんなことはもういいんだ」

「ありがとう、お父さん。私、お父さんの娘でよかった」

上手く笑えたかどうか、松江は不安だった。けれど、顔を合わせて座っている父が今までにない優しい表情を浮かべてくれたから、松江はそれで十分だった。

「それとね、お父さんが私にくれた贈り物、一緒に飲もうよ」

「なんだ、母さんが出したのか」

過去に戻って悪いことだけを消し去ることは出来ない。だから松江は、やり直すことの出来ない失敗や後悔と向き合って、自分自身の未来を生きていかなければならない。

彼女にとって、父のグラスに酒を注ぐことがその第一歩となる。

「明日の飛行機で、東京に戻るから」

「そうか」

松江は父の差し出したグラスに酒を注いだ。ジワリと滲む視界の中で、酒が小さく波打った。

「辛いことも沢山あるけど、私はまだ頑張れるから。だから心配しないでね」

「ああ」

その時、松江が持つニワトリの甕を父が手にした。

「どれ、お前にも注いでやる」

父の優しい申し出に、松江は小さい子どものように甘えることにした。二十年前は赤の他人。けれど、年月を重ねた酒がその深みを増していくのと同じように、家族という絆もまた、固く強くなっていく。

松江は自分のグラスに注がれた酒をジッと見た。芳醇な香りが鼻をツンと刺し、そのせいで頭の奥がジーンと熱くなる。やがて涙が一粒、グラスの上に落ちていった。

「乾杯」

その酒の名前は、松藤。

二十年の眠りから覚め一粒の涙と混ざった時、松江と藤夫の二人の親子は、血の繋がりよりも固い絆で結ばれる。

(了)